

23 A, Bの二人がそれぞれ1個のさいころを3回投げ、3つの出た目を使って3桁の自然数をつくる。Aは1回目に出た目を百の位、2回目に出た目を十の位、3回目に出た目を一の位の数として3桁の自然数をつくる。Bは出た3つの目を百の位、十の位、一の位のいずれかとする3桁の自然数のうち最大となる数をつくる。このとき、次の問いに答えなさい。

- (1) Aのつくることのできる3桁の自然数は何個あるか答えなさい。
- (2) Bのつくることのできる3桁の自然数は何個あるか答えなさい。
- (3) Bの1回目に出た目が2であったとき、Bのつくる3桁の自然数が226より小さくなる確率を求めなさい。
- (4) Aの1回目と2回目に出た目がそれぞれ5と4であり、Bの1回目に出た目が4であったとき、Bのつくる3桁の自然数がAのつくる3桁の自然数より大きくなる確率を求めなさい。

〔福島〕

(1) $6^3 = 216$ 個

(2) $x \geq y \geq z$ のとき $x+2 > y+1 > z$ とでき1以上8以下の中から異なる3個の整数を選び、大きい方から $x+2, y+1, z$ とすればよいので、求めるものは ${}_8C_3 = 56$ 個

◀ $x > y > z, x = y > z, x > y = z, x = y = z$ と場合分けして数えてもよいが、このアイデアは身につけてほしい

(3) 2回目、3回目ともに1または2が出ることに限るので、求める確率は $\left(\frac{2}{6}\right)^2 = \frac{1}{9}$

(4) Bのつくる自然数が、Aのつくる自然数より大きくなるのは、Bに6または5の目が出る必要条件であり、

◀ 必要条件を確認し、(できるだけ排反となる)条件で場合分け

- Bの2回目、3回目に少なくとも1回6の目が出れば、Aの3回目は何でもよい。

$$\left(1 - \left(\frac{5}{6}\right)^2\right) \times \frac{6}{6} = \frac{66}{216}$$

◀ 後の和を計算するために、約分しない方がよい

- Bの2回目、3回目に6の目が出ないとき

- Bの2回目、3回目がともに5の目であるときAの3回目は何でもよい。

$$\left(\frac{1}{6}\right)^2 \times \frac{6}{6} = \frac{6}{216}$$

- Bの2回目、3回目が5と4の目であるときAの3回目は1, 2, 3のいずれか。

$$2! \times \left(\frac{1}{6}\right)^2 \times \frac{3}{6} = \frac{6}{216}$$

- Bの2回目、3回目が5と3の目であるときAの3回目は

1, 2 のいずれか。

$$2! \times \left(\frac{1}{6}\right)^2 \times \frac{2}{6} = \frac{4}{216}$$

- B の 2 回目, 3 回目が 5 と 2 の目であるとき A の 3 回目は 1 のみ。

$$2! \times \left(\frac{1}{6}\right)^2 \times \frac{1}{6} = \frac{2}{216}$$

以上の場合しかなく, これらは排反なので求める確率は

$$\frac{66 + 6 + 6 + 4 + 2}{216} = \frac{84}{216} = \frac{7}{18}$$

◀ 最終の解答では約分する

24 xy 平面上に中心 $(-3, -2)$ 、半径 $\sqrt{3}$ の円 C と、直線 $l: y = tx + 1$ がある。 t は実数とする。
 C と l が異なる 2 点 A, B で交わり、 A, B の x 座標をそれぞれ a, b ($a < b$) とするとき、
 以下の問いに答えなさい。

- (1) $t = \sqrt{2}$ であるとき、 C の中心と l の距離を求めなさい。
- (2) t のとり得る値の範囲を求めなさい。
- (3) 弦 AB の長さが最大となる t の値を求めなさい。
- (4) a, b を t を用いてそれぞれ表しなさい。
- (5) 弦 AB の長さが 2 となる t の値を求めなさい。

〔岩手県立〕

- (1) $t = \sqrt{2}$ のとき l の方程式を $\sqrt{2}x - y + 1 = 0$ とし、 $(-3, -2)$ との距離は公式を用いて

$$\frac{|-3\sqrt{2} + 2 + 1|}{\sqrt{(\sqrt{2})^2 + (-1)^2}} = \frac{3\sqrt{2} - 3}{\sqrt{3}} = \sqrt{6} - \sqrt{3}$$

- (2) l の方程式を $tx - y + 1 = 0$ とし、円 C の中心から l までの距離を d とする。公式から

$$d = \frac{|-3t + 2 + 1|}{\sqrt{t^2 + (-1)^2}} = \frac{|3t - 3|}{\sqrt{t^2 + 1}} \quad \text{であり}$$

C と l が異なる 2 点で交わるのは $d < \sqrt{3}$ となるときなので

$$\frac{|3t - 3|}{\sqrt{t^2 + 1}} < \sqrt{3} \quad \text{を解く。}$$

$$3|t - 1| < \sqrt{3} \cdot \sqrt{t^2 + 1}$$

両辺の値は非負なので、平方して比較してよい。

$$9|t - 1|^2 < 3(t^2 + 1)$$

$$3(t - 1)^2 < t^2 + 1$$

$$2t^2 - 6t + 2 < 0$$

$$t^2 - 3t + 1 < 0 \quad (\text{左辺}) = 0 \text{ を解くと } t = \frac{3 \pm \sqrt{5}}{2} \text{ から}$$

$$\text{求める } t \text{ の範囲は } \frac{3 - \sqrt{5}}{2} < t < \frac{3 + \sqrt{5}}{2}$$

- (3) 弦 AB の長さが最大になるのは l が円 C の中心を通るときである。したがって

$$-2 = -3t + 1 \quad \text{を解いて } t = 1$$

- (4) 円 C の方程式は $(x + 3)^2 + (y + 2)^2 = 3$ であり、 $y = tx + 1$ を

◀ 円と直線が交わる条件

◀ 無理式を含んだ不等式を解く

◀ 円について長さが最大の弦は直径

代入すると

$$(x+3)^2 + (tx+1+2)^2 = 3$$

$$(1+t^2)x^2 + 6(1+t)x + 15 = 0 \quad \text{解の公式から}$$

$$x = \frac{-3(1+t) \pm \sqrt{9(1+t)^2 - 15(1+t^2)}}{1+t^2}$$

$$= \frac{-3(1+t) \pm \sqrt{-6(t^2 - 3t + 1)}}{1+t^2}$$

(2) の範囲のとき、異なる 2 つの実数解となるので $a < b$ から

$$a = \frac{-3(1+t) - \sqrt{-6(t^2 - 3t + 1)}}{1+t^2},$$

$$b = \frac{-3(1+t) + \sqrt{-6(t^2 - 3t + 1)}}{1+t^2}$$

(5) (2) で求めた d を用いる。円 C の中心を C 、弦 AB の中点を M とすると $\triangle CAM$ は $\angle CMA = 90^\circ$ の直角三角形となる。

三平方の定理から

$$CA^2 = CM^2 + AM^2$$

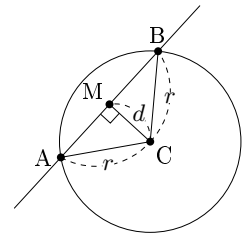
$$CM^2 = CA^2 - AM^2$$

$$\left(\frac{|3t-3|}{\sqrt{t^2+1}} \right)^2 = (\sqrt{3})^2 - 1^2 = 2$$

$$9(t-1)^2 = 2(t^2+1)$$

$$7t^2 - 18t + 7 = 0 \quad \text{したがって } t = \frac{9 \pm 4\sqrt{2}}{7}$$

◀ 円の弦の長さを円の半径と円の中心から弦までの距離から求める常套手段



- 25 各辺の長さが1の正四面体OABCを考える。線分ABを3:1に外分する点をDとし、線分ACを2:1に外分する点をEとするとき、以下の間に答えよ。ただし、

$$\vec{OA} = \vec{a}, \quad \vec{OB} = \vec{b}, \quad \vec{OC} = \vec{c}$$

で表す。

- (1) 点Pは平面ODE上の点で \vec{AP} がこの平面に垂直になるとする。 \vec{AP} を \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} を用いて表せ。
- (2) (1)で定めた点Pに対して、線分APと平面OBCの交点をQとするとき、 \vec{AQ} を \vec{a} , \vec{b} , \vec{c} を用いて表せ。
- (3) $\triangle OBC$ の重心をGとするとき、 \vec{AG} と(2)で求めた \vec{AQ} の内積 $\vec{AG} \cdot \vec{AQ}$ を求めよ。

[宮城教育]

$$|\vec{a}| = |\vec{b}| = |\vec{c}| = 1, \quad \vec{a} \cdot \vec{b} = \vec{b} \cdot \vec{c} = \vec{c} \cdot \vec{a} = \frac{1}{2} \text{ である。}$$

$$(1) \quad \vec{OD} = \frac{(-1)\vec{OA} + 3\vec{OB}}{3 + (-1)} = \frac{-\vec{a} + 3\vec{b}}{2},$$

$$\vec{OE} = \frac{(-1)\vec{OA} + 2\vec{OC}}{2 + (-1)} = -\vec{a} + 2\vec{c}$$

ここで

$$\vec{OD} \cdot \vec{OD} = \frac{1}{4} (|\vec{a}|^2 - 6\vec{a} \cdot \vec{b} + 9|\vec{b}|^2) = \frac{7}{4}$$

$$\vec{OE} \cdot \vec{OE} = |\vec{a}|^2 - 4\vec{a} \cdot \vec{c} + 4|\vec{c}|^2 = 3$$

$$\vec{OD} \cdot \vec{OE} = \frac{1}{2} |\vec{a}|^2 - \vec{a} \cdot \vec{c} - \frac{3}{2} \vec{b} \cdot \vec{a} + 3\vec{b} \cdot \vec{c} = \frac{3}{4}$$

$$\vec{OA} \cdot \vec{OD} = -\frac{1}{2} |\vec{a}|^2 + \frac{3}{2} \vec{a} \cdot \vec{b} = \frac{1}{4}$$

$$\vec{OA} \cdot \vec{OE} = -|\vec{a}|^2 + 2\vec{a} \cdot \vec{c} = 0$$

平面ODE上の点Pについて、実数 s , t を用いて

$$\vec{OP} = s\vec{OD} + t\vec{OE} \dots \textcircled{1} \text{ と表すことができる。}$$

$\vec{AP} \perp (\text{平面 OED}) \Leftrightarrow \vec{AP} \perp \vec{OD}$ かつ $\vec{AP} \perp \vec{OE}$ から

- $\vec{AP} \perp \vec{OD}$ すなわち $\vec{AP} \cdot \vec{OD} = 0$ となるのは

$$(s\vec{OD} + t\vec{OE} - \vec{OA}) \cdot \vec{OD} = 0$$

$$\frac{7}{4}s + \frac{3}{4}t - \frac{1}{4} = 0 \dots \textcircled{2}$$

- $\vec{AP} \perp \vec{OE}$ すなわち $\vec{AP} \cdot \vec{OE} = 0$ となるのは

$$(s\vec{OD} + t\vec{OE} - \vec{OA}) \cdot \vec{OE} = 0$$

$$\frac{3}{4}s + 3t = 0 \dots \textcircled{3}$$

$$\textcircled{2}, \textcircled{3} \text{ を解いて } (s, t) = \left(\frac{4}{25}, -\frac{1}{25} \right)$$

◀ 分点の位置ベクトル

◀ 後に必要となる内積の値を準備しておく方が、解答の流れがスムーズにいく。(使用しない値もあるかもしれない)

◀ 平面上の点の位置ベクトル

◀ ベクトルと平面の垂直条件

◀ s と t の方程式で表すようにもっていく(2本作れば s, t を求めることができるようになる)

① に代入し

$$\begin{aligned}\overrightarrow{AP} &= \overrightarrow{OP} - \overrightarrow{OA} \\ &= \frac{4}{25} \left(\frac{-\vec{a} + 3\vec{b}}{2} \right) - \frac{1}{25} (-\vec{a} + 2\vec{c}) - \vec{a} \\ &= -\frac{26}{25} \vec{a} + \frac{6}{25} \vec{b} - \frac{2}{25} \vec{c}\end{aligned}$$

(2) 点 Q が AP 上にあるとき、実数 k を用いて $\overrightarrow{AQ} = k\overrightarrow{AP}$ とできる。このとき

$$\begin{aligned}\overrightarrow{OQ} &= \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{AQ} \\ &= \left(1 - \frac{26}{25}k\right) \overrightarrow{OA} + \frac{6}{25}k\overrightarrow{OB} - \frac{2}{25}k\overrightarrow{OC}\end{aligned}$$

\overrightarrow{OA} , \overrightarrow{OB} , \overrightarrow{OC} は 1 次独立であり、点 Q が平面 OBC 上にあるとき $1 - \frac{26}{25}k = 0$ から $k = \frac{25}{26}$

$$\text{したがって } \overrightarrow{AQ} = \frac{25}{26} \overrightarrow{AP} = -\frac{1}{13} (13\vec{a} - 3\vec{b} + \vec{c})$$

(3) $\overrightarrow{OG} = \frac{\vec{b} + \vec{c}}{3}$ であり $\overrightarrow{AG} = \overrightarrow{OG} - \overrightarrow{OA} = \frac{-3\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}}{3}$

$$\begin{aligned}\overrightarrow{AG} \cdot \overrightarrow{AQ} &= \left(\frac{-3\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}}{3} \right) \cdot \left(-\frac{1}{13} (13\vec{a} - 3\vec{b} + \vec{c}) \right) \\ &= -\frac{1}{39} (-3\vec{a} + \vec{b} + \vec{c}) \cdot (13\vec{a} - 3\vec{b} + \vec{c}) \\ &= -\frac{1}{39} (-39|\vec{a}|^2 - 3|\vec{b}|^2 + |\vec{c}|^2 + 22\vec{a} \cdot \vec{b} - 2\vec{b} \cdot \vec{c} + 10\vec{c} \cdot \vec{a}) \\ &= -\frac{1}{39} (-39 - 3 + 1 + 11 - 1 + 5) \\ &= \frac{2}{3}\end{aligned}$$

◀ ベクトルの相等